

玉城盛義の芸歴と芸風

大城 學

(沖縄県立博物館)

Records of Performed Play of Seigi TAMAGUSUKU, One of Famous
Okinawan Performers, and the Character of His Performance

Manabu OSHIRO

(Okinawa Prefectural Museum)

【一】

「タマグシク ヌ ターリー（玉城のお父さん）」という愛称で、芸能人だけでなく多くの文化人から尊敬されていた玉城盛義（1889・12・20～1971・12・19）は、真境名由康（1889～1982）同様、明治・大正・昭和の3代にわたって沖縄芸能界で役者、舞踊家、創作者として活躍する一方で、多くの弟子を養成した。彼らの偉大な業績を顕彰しようということで、1989年に由康の生誕100年記念事業が行われ、1990年に盛義の生誕100年記念事業が行われた。〔註1〕

両者の生誕100年記念事業で、筆者は彼らの芸歴をまとめる仕事を仰せつかったが、こと盛義については、まとめる時間がわずか4日間しか与えられず、充分に意を尽くすことができなかった。〔註2〕

その後、盛義の芸歴に関する資料を収集したのでここに紹介し、盛義の人となり、芸風について考察することにした。

はじめに、盛義を紹介した適切な文章があるので、それを引用したい。〔註3〕

玉城盛義 たまぐすく・せいぎ 役者。那覇泉崎村に生まれる。父盛寿、叔父盛政・盛重とともに明治・大正時代を代表する役者である。大正初年ごろから舞踊家として名をなし、辻遊郭を中心とした地域で舞踊を教えた。戦後も玉城流玉扇会を率い優秀な舞踊家や組踊役者を育てた。また温厚な人がらと役者としての高い技量を買われて、1932年（昭和7）から44年の10・10空襲まで、那覇市内の大正劇場で、高安高俊が経営する真楽座の座長を務め、珊瑚座とともに沖縄演劇界

を二分する勢力を誇っていた。代表作には小歌劇、〈戻り駕籠〉や雑踊の貫花などがある。享年81歳。

[芸歴]

1889(明22)年・12月20日、盛義は玉城盛壽の長男として、那覇下泉町に生まれる。盛壽は長男で、次男は盛有、三男は盛重である。3人とも仲毛芝居で活躍した。なかでも盛重(1868~1945)は明治以後の沖縄芸能界に多大な影響を与えた。なお、盛重はのちに盛義の養父となる。

1890(明24)年・この頃、那覇市辻町に端道劇場、首里に寒水川芝居ができる。

1894(明27)年・6歳。盛義は、那覇東町にあった仲毛芝居(沖縄初の本格的な芝居小屋)において初舞台を踏む。

盛義の初舞台の演目が何であったのかということについて、二通りある。まず、盛義の手記には「組踊『銘苅子』の男子(おめけり)役で、初舞台を踏む。そのとき、叔父・盛重が天女を演じた」とある。もうひとつは1968(昭43)年9月8日(日)の琉球新報に盛義は「わが踊り初めの記」(談話)を載せていて、それには、初舞台は組踊「大川敵討」の子役(若按司役)であったといい、その頃のことを次のように記している。

私が初舞台を踏んだのは明治の中ごろ、6歳のときだった。父やオジ(のちの養父・玉城盛重)たちが、那覇で芝居小屋をやっていて、これを〈仲毛芝居〉と呼んでいたが、私も毎日出入りしていた。そのうちオジの踊りや芝居を見よう見まねで覚え、楽屋裏などでやっていた。これをオジが見て「これはいい。素質がある」というわけで、けいこをつけてもらい、組踊「大川敵討」の子役として起用された。これが初舞台となった。

1895(明28)年・仲毛芝居において、組踊「女物狂」の童子を演じる。

1896(明29)年・4月、真和志村真和志尋常小学校に入学し、1902年(明35)年3月に卒業。

1903(明36)年・那覇市辻町にあった上の芝居(新演芸場)に出演する。

1904(明37)年・この頃、盛重は芝居を退き、その後は舞踊・組踊・琴の師匠として後進の指導に当たる。

1905(明38)年・那覇辻町の球陽座に出演する。球陽座は渡嘉敷守良・守礼を中心にしてこの年に上の芝居で旗揚げした。また、この年、好劇会を改め、沖縄座が下の芝居で旗揚げ、上間正品、真境名由祚らが中心となる。

・糸数兄弟の組織する劇団に加入し、久米島をはじめ離島巡業に出る。この劇団で古典舞踊の柳、天川、かせかけ、ながらた、貫花の5曲を習得する。

1906(明39)年・この頃から盛義は、叔父・盛重から本格的に古典舞踊と組踊の手ほど

きを受ける。盛義は、前出の「わが踊り初めの記」（1968年）で盛重の教え方について、次のように語っている。

私としては養父（盛重）の古典舞踊や組踊に完全に魅せられ、自分も早く古典を、と思ったけれども、「まだ早い。基礎からしっかりやらねばならない」と、まず舞踊からやり直すことになった。けいこはきびしかった。毎日「なっていない」としかられた。18歳のころ、ようやく古典舞踊と組踊を本格的に習いはじめた。このころ仲毛芝居は経営難などで解放したので、ほとんど毎日、家でけいこに明け暮れた。私はすでに養父のあとを継いでりっぱな舞踊家になるんだ、との決意を固め、情熱をわかせたが、それとは反対に、養父はさらにきびしくなり「お前はダメだ。踊りなんかできないからやめなさい」とサジを投げるようなことをいい、教えてくれない日もあった。……養父の女踊りは実に美しかった。私もこれを少しでもまねようと必死になったのだけれども、無理だった。「腰がかたい。からだのこなしかたが、なっていない」と、養父のどなり声が飛ぶ。そのたびにすくんでしまったものだ。しかし、養父に突き放されまいと、夢中だった。見込みないからけいこに来るな、といわれても「教えて下さい」と頭を下げていった。養父は「来るな、といったのになぜおめおめと出て来たか」といいながらも、それでも機嫌を直して教えてくれた。そういう養父は私からみてまさに〈芸の鬼〉という感じであったが、それだけにかれの芸に私はいい知れぬ深さ、重厚さをヒシヒシと感じ、少しでもそれに近づく努力をしたのである。ほんの少しの悪い点も見のがさなかつたし、毎日毎日が私にとっては緊張の連続で、けいこが終わるといつもヘトヘトになったものである。こうして22歳ごろから、まがりなりも代げいこ役までこぎつけた。踊りというもののすばらしさ、その芸術性を自分なりに本当に理解したのはこの頃からではないかと思う。

また、盛義は1969年11月3日、琉球古典芸能の継承と普及に尽くした功績で、第5回琉球新報賞を受賞しているが、そのときの新聞のインタビューで、盛重の教え方について次のように語っている（1969年11月3日「琉球新報」朝刊）。

いや、きびしいものでしたよ。「かぎやで風」の歩き方ひとつを3か月もさせられました。とにかく1つの踊りを3か月も4か月も、できるまで続けさせられました。けいこがはじまたらさいご、何時間でもご自分の得心のゆくまでは休ませてくれませんでした。よくできたときには、はじめて「イフェーユクレー（少しやすみなさい）」といってくれました。それでも舞台での弟子の演技にはとても気を使い、子役の私の演技などは幕内からのぞいていらして、終わって幕内にはいってきたところへ「アマーノーショー（あそこはちょとなおしなさい）」といってくれました。

- 1907（明40）年　・那覇市辻町に盛重が組踊と箏（琴）の研所を開設する。
　・盛義、那覇辻町の通称・奥村渠に琉舞の稽古場を開設する。
- 1910（明43）年　・1月、新垣松舎を座長に中座を結成。座員に伊良波尹吉、多嘉良朝成、真境名安規、平良良仁、永村清蒲ら。
- 1911（明44）年　・中座で伊良波尹吉作の喜歌劇「仲直り三良グワー」を上演。アンマー役を盛義、三良グワー役を親泊興照、主役を平良良勝が演じて好評。
- 1913（大2）年　・1月、中座で新派劇「ストライキ」を上演、盛義は女房役を演じる。
　そのときの盛義の演技について「琉球新報」は「玉城の清水女房是れは又如何なる考えにや二十銭の火夫の女房が大丸まげ衣服も夫と不釣合であった」との劇評を載せている（1月14日）。
　・2月、中座で「忠臣蔵」を上演、盛義は源之助を演じる。
　・6月25日、「沖縄毎日」の中座の劇評は「……次に越来節、伊良波の富里、玉城のみやらべが気合いがしつくり合ってゐてよかったです、伊良波の富里の所作は軽妙と云ふばかりなし、玉城の女も色氣たっぷり……（略）」。玉城とは盛義のことである。
- 1914（大3）年　・9月30日、「琉球新報」の中座の劇評は「……病氣全快娼妓になる処から愈々一等美人として辻仲道に現はる玉城の女は充分活躍してゐた」とある。
　・中座で伊良波尹吉作の歌劇「奥山の牡丹」を上演、盛義は勢頭の娘を演じて好評であった（三郎は平良良勝、真玉津は真境名安規、山戸は伊良波尹吉）。
- 1915（大4）年　・中座で、盛義は座長・新垣松舎の相手役（女形）に抜擢される。5月28日の「琉球新報」の劇評は「中座の飛行機劇……筋は女学生玉城のツルが台湾帰りの金満家新垣加那の五百円のダイヤモンドに目がくくれて……（略）」とある。
　・中座で「仮名手本忠臣蔵」を上演、盛義は平右衛門の役を演じる。
　・6月、那覇市西本町の埋め立て地に、大正劇場が建てられる。柿落としは真境名由祚、玉城盛義らが出演する。1932（昭7）年に真楽座（座長：盛義）が結成され、同劇場に拠る。
- 1916（大5）年　・中座で新派劇「將軍の娘」を上演、盛義は鈴鳴渡侯爵の令嬢の役を演じる。8月23日の「琉球新報」の劇評は「……女形の玉城が此頃以前よりも柔らかで女らしくなってきたのは面白い」とある。
- 1917（大6）年　・中座で「仮名手本忠臣蔵」を上演、盛義は判官役を演じる。
　・辻町の招聘により舞踊妓養成のため、町内4か所に稽古場を設ける。
- 1918（大7）年　・2月、中座で組踊「花売り縁」を上演、盛義は乙樽の役を演じる。
　森川の子を新垣松舎、薪取を平良良勝が演じている。
　・2月、中座で組踊「大川敵討」を上演、盛義は乙樽の役を演じる。2月24日の「琉

球新報」の劇評は「当今村原役者としては新垣に超すのは居ないだろう少し難を云ふと何んだか当夜は台詞に力がなかった、今少し生氣があって欲しい、次に玉城の乙樽と我如古のアヤメー兩人共中々達者なもの、殊に玉城は此頃メキメキ役者をあげた、新派者の女形をさせる時は何だかゴツゴツしてゐる所もあるが今夜の乙樽はよく演つてゐた」とある。

- 3月、中座で組踊「手水の縁」を上演、盛義は玉津の役を演じ、山戸を親泊興照が演じている。

1919(大8)年・那覇辻町で大火があり、上の芝居、下の芝居、中座の3座とも焼失。

大火後、盛義は辻町で琉球舞踊の指導に専念する。

1921(大10)年・沖縄舞踊団を組織し、大阪公園を行う。その後、ハワイの沖縄県出身者の招きで、大阪からハワイへ行き、公演を行う。

1923(大12)年・沖縄新劇運動に参加する。新垣松含、島袋光裕らと元映画常設の「帝国館」で<那覇小劇場>をおこしたが、間もなく解散する。

1924(大13)年・大正劇場で真境名由康作の歌劇「伊江島ハンドーファー」初演。初演のハンドーファーは盛義、マチグラーは儀保松男、伊江島の男加那は伊良波尹徳、父親は我如古弥栄、村頭は佐渡山安盛、船頭主は多嘉良朝成という配役で評判をよんだ。

1929(昭4)年・渡嘉敷守良一行に参加し、第3回ハワイ公演へ行く。メンバーは盛義、渡嘉敷守良、伊良波尹吉、伊良波尹徳、佐渡山安盛、山城裕礼、国吉真仁、宜保世勲、山川加那らであった。

1930(昭5)年・1月、大正劇場で伊良波尹吉作の歌劇「茶仁」「あやぐ」「琉球故事・一つ家(鬼婆)」、現代劇「泉さん」を上演、盛義、儀保松男、我如古弥栄ら出演する。

- 大正劇場で尚典侯爵の故郷訪問歓迎の芸能公演が行われ「大川敵討」を上演し、盛義は乙樽を演じる。

1931(昭6)年・8月、真境名由康を座長とする劇団「珊瑚座」が西本町の旭劇場で結成される。

1932(昭7)年・6月、盛義、高安高俊、仲井間盛良の3人によって大正劇場で、劇団「真楽座」を結成、盛義は座長となる。「真楽座」という座名は、仲井真盛良の<真>と高安高俊の経営する波之上のバー樂天地の<樂>をとって命名したものだと

いう。なお、のちに仲井真盛良は珊瑚座に移る。座員は比嘉良順、儀保松男（2代目）、大宜見朝良、我如古弥栄、上間昌成、大見謝垣幸、平安座英太郎、知念喜康、照屋寛任、山里次郎、大宜見小太郎、池宮城秀武、宜保世政、宜保世勲、小橋川三郎、比嘉良徳、富村朝教、国吉政仁、宇根伸三郎ら。多嘉良朝成作「琉球史劇・沖縄入り」、歌劇「秋の空」、組踊「手水の縁」を上演する。

真楽座結成の事業をもう少し詳しくみてみよう。〔註4〕

大正3年の新生劇団の解消の頃から、伊良波尹吉、真境名由康は合同で大正劇場の経営に参加していた。真境名が珊瑚座結成のため別れたので、伊良波は渡嘉敷守良と合同しハワイ公演へ出発した。ハワイで2人は決裂し、帰郷するや渡嘉敷は南洋へ行き、伊良波は再び大正劇場に入り、玉城盛義、仲井真盛良の協力を得て興業を続けた。このグループへ高安高俊が入り、伊良波は追い出され、玉城盛義が座長、高安高俊が経営者になり、真楽座が結成された。

・その頃、真楽座と珊瑚座が人気を二分していた。沖縄商業演劇の黄金期である。

1933（昭8）年　・真楽座で上間昌成作の歌劇「愛の雨傘」初演。曲は盛義、多嘉良朝成らの合作。「愛の雨傘」は大当たりで、1か月近くロングランしたという。

1935（昭10）年　・盛義、「戻り駕籠」を振付け、発表。この舞踊劇は歌舞伎舞踊＜戻駕籠＞をヒントに、当時、辻町を中心に流行していたサイレン節に振付けた。

1936（昭11）年　・5月30日・31日、東京・日本青年館で日本民俗協会主催の「琉球古典芸能大会」を開催。盛義は舞踊「上り口説」「下り口説」「浜千鳥」「天川踊り」、組踊「執心鐘入」の小僧（一）、「二童敵討」の供（二）、「銘苅子」の銘苅子に出演する。出演者はほかに玉城盛重、真境名由康、新垣松合、親泊興照、儀保松男、上間盛敏、金武良章、名護愛子、新垣芳子、根路銘たま子、田代たか子、山口千寿子、真境名澄子、真境名苗子（以上、舞踊）、金武良仁、伊佐川世瑞、古堅世保、池宮城喜輝、又吉栄義、仲嶺盛竹（以上、音楽）らである。

1939（昭14）年　・7月、真楽座で「真壁チャーン」を上演、盛義出演する。

・11月、真楽座で「俺も男の一匹」に盛義、多嘉良朝成ら出演。仲井真盛良作、盛義振付の舞踊劇「身替り音頭」を上演。

・12月、真楽座7周年記念興行で「江田親方」（一名、ミシバ王）、舞踊劇「ウシボーボージャ」、組踊「護佐丸忠義伝」、現代歌劇「縁の餅」、盛義振付の真楽座幹部総出演の打組踊りを上演。

・この頃、真楽座で盛義作の「卯年の春」を上演する。

1940（昭15）年　・この頃、真楽座は大阪戎座で公演。公演後、大宜見朝良、大宜見小太郎ら大阪に残留し、「琉球演芸舞踊団」を結成する。

- ・10月、那覇署は真楽座と珊瑚座の代表者に、安価な恋愛物の上演を排除するよう注意する。

1942（昭17）年　・1月、那覇署は真楽座の再興行願に対して、①演劇はすべて標準語を使用すること（但し当分標準語演劇は1日1題以上の上演で可）、②歌劇は全廃すること、を条件に認める。

1944（昭19）年　・10月10日、那覇大空襲となり、大正劇場（真楽座）、国民劇場（珊瑚座）とも焼失。真楽座、珊瑚座ともに解散。

1945（昭20）年　・6月、盛義は米軍の捕虜となり、宜野湾村野嵩の捕虜収容所に収容されるが、7月に釈放される。

・夏、石川城前小学校校庭で、仮設舞台をつくって演芸大会。盛義、伊良波尹吉、島袋光裕、比嘉正義、宮城能造、親泊興照、平良良勝、幸地亀千代、屋嘉宗勝、仲嶺盛竹ら出演。舞踊「かぎやで風」、組踊「花壳の縁」などを上演。

・芸能連盟を結成し、民間および米軍関係の慰問公演を行う。役者は盛義、伊良波尹吉、島袋光裕、比嘉正義、宮城能造、親泊興照、平良良勝を中心に、地謡は幸地亀千代、屋嘉宗勝、又吉全啓、板良敷朝松、仲嶺盛竹、マネージャー役に屋部憲、舞台装置に金城安太郎、大城皓也という顔ぶれ。約2か年で187回の公演を行った。

・この年、盛義は宜野湾村野嵩で、戦後初めての琉球舞踊研究所を開設。宜野湾で研究所を開設している間、盛義は本島各地へムラ踊りの指導に出かけることがあった。ひと月間も研究所をあけて現地に滞在して、指導にあたることもあった。

1946（昭21）年　・4月、沖縄諮詢会文化部によって、「松」「竹」「梅」の3劇団が誕生する。官営劇団。盛義は＜梅劇団＞の団子長となる。＜松劇団＞団長は島袋光裕、＜竹劇団＞団長は平良良勝、＜梅劇団＞団長は伊良波尹吉。梅劇団は主に島尻地区を巡回公演した。1947年4月に劇団の自由興行が認可されると、梅劇団もそれ以後は一般劇団と同様、島尻一円の興行から沖縄本島全域にわたる自由興行に移ったがあまり振わず、1950年に解散した。

1947（昭22）年　・盛義は、平安座英太郎とともに女性だけの舞踊団＜南月舞踊団＞を設立し、地方巡業に出る。

・11月、沖縄俳優協会結成（会長：伊良波尹吉、副会長：平良良勝・島袋光裕）、会員相互の共催と協会独自の劇場建設が設立目的。

1948（昭23）年　・劇団「ときわ座」（座長・真喜志康忠）結成、盛義は顧問となる。

1950（昭25）年　・1月、沖縄劇場で、在沖縄軍司令官シーツ少将の就任祝賀公演に出演し、盛義は親泊興照、宮城能造らと「かせかけ」を踊る。

1951（昭26）年　・盛義、＜新富座＞を設立する。

盛義はそのころの思い出を、1965年7月1日の沖縄タイムス賞文化賞受賞のときのインタビューにこたえて、次のように語っている。

三味線も焼かれてしまい、何もないで、かん詰の空カンに竹の棒をつけ、糸をひいた簡単な手製の三味線を作り、中央病院や野嵩付近の部隊を慰問してまわっていました。その時、戦災のショックに打ちひしがれた人たちの空虚な心を力づけ慰めた<芸能の力>を私は再認識しました。そこで子どもたちを集め、舞踊を指導したり、新富座という劇団を経営したりしましたが、逆境の中で<芸ひとすじ>に生きたそのころのことが、いちばん印象深く残っています。

1952（昭27）年　・2月、宜野湾村野嵩に設立した琉球舞踊研究所を、那覇市桶川に移す。

1953（昭28）年　・3月、玉城盛義琉球舞踊研究所を「玉扇会」と名乗り、第1回発表会を那覇劇場で開催する。

・4月、那覇劇場で玉城盛重追悼芸能祭。

・11月、日比谷公会堂ほかで、沖縄芸能使節団の公演に出演する。戦後初めての東京公演。盛義は舞踊「高平良万歳」を宮城能造と踊ったほか、組踊「銘苅子」の銘苅子、「女物狂」の座主を演じる。

1954（昭29）年　・6月11日～13日、沖縄タイムス第1回新人芸能祭の舞踊部門の審査委員および運営委員。招待出演で舞踊「古稀の踊り」、盛義振付の「木綿花節」を発表する（世界館）。

1955（昭30）年　・渡嘉敷守良3年忌追悼会を那覇劇場で催す。史劇「今帰仁由来記」、歌劇「三日月」（あかまた）、組踊「大川敵討」を上演、盛義は「大川敵討」の乙樽を演じる。

・3月12日～15日、沖縄タイムス第2回新人芸能祭の舞踊部門の審査委員および運営委員。招待出演で盛義振付の創作舞踊「月下のたわむれ」を発表する（国際劇場、首里劇場）。

1956（昭31）年　・3月、第4回玉扇会発表会で組踊「執心鐘入」を上演、盛義は座主を演じる（那覇劇場）。

・11月28日～30日、沖縄タイムス第3回新人芸能祭の舞踊部門の審査委員および運営委員。

1957（昭32）年　・3月、第5回玉扇会発表会で組踊「姉妹敵討」を上演、盛義は湧川按司を演じる。

・11月15日～18日、沖縄タイムス第4回新人芸能祭の舞踊部門の審査委員および運営委員。招待出演で盛義は「本嘉手久節」を踊る（タイムスホール）。

1958（昭33）年　・7月4日～6日、沖縄タイムス第5回新人芸能祭の舞踊部門の審査委

員および運営委員。招待出演の創作部門で上間朝久作の創作舞踊「母天女」に父銘苅子を演じる。母天女は宮城能造が演じた（タイムスホール）。この作品は、同年4月8日・9日、沖縄タイムスに上間朝久が台本を掲載したもので、内容は、玉城朝薰作の舞踊「銘苅子」からヒントを得たものだが、上間は踊りを多くとり入れて舞踊劇に仕立ててある。

• 7月8日、沖縄タイムス第5回新人芸能祭受賞式で盛義は創作舞踊招待で、感謝状を受賞する。

• 8月8日～10日、第5回玉扇会発表会＜創作舞踊＞を催す（那覇劇場）。盛義は創作舞踊「壽の舞」「漏池の大蛇」に出演し、組踊「伏山敵討」の指導をする。

• 12月18日、沖縄文化協会主催、米琉官民代表招待＜琉球舞踊鑑賞会＞が催され、盛義は島袋光裕、親泊興照、宮城能造らと「馬山川」を踊る（タイムスホール）。

1959（昭34）年 • 11月14日・15日、沖縄タイムス第1回芸術祭で舞踊部門の審査員。招待出演で舞踊「金細工」のアンマーを盛義、加那兄を親泊興照、遊女・真牛を宮城能造が踊る（タイムスホール）。この年から沖縄タイムス社は＜新人芸能祭＞を＜芸術祭＞に改め、芸術文化のすべての部門を総合公開することになった。

1960（昭35）年 • 3月、第7回玉扇会玉城盛義琉球舞踊研究所発表会で、上間朝久作「王女と犬太郎」を盛義振付・演出で発表する（那覇劇場）。

• 11月21日・22日、沖縄タイムス第2回芸術祭で舞踊部門の審査員。招待席で盛義振付・出演の「王女と犬太郎」を上演する（タイムスホール）。この作品で、沖縄タイムス芸術祭賞を受賞する。この年の盛義の舞踊部門の審査評（談話）回数が重なる度に応募者が多くなった事は喜ばしい。女踊は見おとりがなく無難。化粧、着付、目付、足のはこび殆ど良くなっている。二才踊のゼー、前の浜は活発でみごとな事であった。

1961（昭36）年 • 4月1日～3日、第8回玉扇会玉城盛義琉球舞踊研究所発表会＜舞踊祭＞を催す（那覇劇場）。

• 11月18日・19日、沖縄タイムス第3回芸術祭で舞踊部門の審査員。真境名由康と「老人老女踊」を踊る。また、上間朝久作の新組踊「中城落城」を盛義振付で上演し、盛義は中城接司護佐丸を演じる。この作品で沖縄タイムス芸術祭努力賞を受賞する。この年の盛義の舞踊部門の審査評（談話）総体的に見て踊りの質が大変よくなっている。化粧、衣装の着付けもよく、今回から男性の出演者がだんだんふえたことは喜ばしい。しかしながらには着付けが悪かった出演者がおり、これから注意してもらいたい。

1962（昭37）年 • 5月19日～21日、第9回玉扇会玉城盛義琉球舞踊研究所発表会＜玉扇

会夏のおどり>を催す(那覇劇場)。

- 11月3日、琉球新報社第1回南条宏舞踊賞を受賞する。この賞は、名古屋市で南条舞踊学校を主催する那覇出身の南条宏が、とくに琉球舞踊界で功績のあった方がたを表彰するために設けたものである。
- 11月17日・18日、沖縄タイムス第4回芸術祭で舞踊部門の審査員。招待出演で盛義は真境名由康、島袋光裕、親泊興照、宮城能造、真境名佳子、宇根伸三郎、比嘉澄子、西川扇一郎と「かぎやで風」を踊る。また、創作組踊の部門で上間朝久作「百度踏揚(勝連のくだりの巻)」を盛義演出・振付で上演する。盛義舞踊研究所は招待創作舞踊の部で「鶯の鳥」を踊る。また、盛義脚色・演出で創作舞踊「普天間権現」を上演、盛義は老翁(仙人)を演じる。この年、盛義は沖縄タイムス芸術祭奨励賞を受賞する。

1963(昭38)年
• 1月18日、湯川博士御夫妻歓迎「琉球古典舞踊鑑賞会」で盛義は老人踊を踊る(タイムスホール)。

- 3月29日~31日、玉扇会10周年記念公演で、盛義は創作舞踊「百度踏揚」の阿麻和利、創作舞踊「護佐丸」の護佐丸を演じる。この記念公演のパンフレットで、盛義は主催者のあいさつを「玉城流を名乗ります」と題して、「近年みなさまがたご承知の通り、琉球舞踊界にもいろいろ流派が生じ、今後この傾向が増加していくものと考えられますので、当研究所におきましても流派を名乗る必要を感じておりましたが、最近後援会の方々からのすすめもあり、今回の十周年記念発表会を好機と致しまして、今後は『玉城流』を名乗らせていただくことに相成りました」と述べている。玉城流の発足である。

• 11月16日・17日、沖縄タイムス第6回芸術祭で舞踊部門の審査員。招待組踊部門で「花壳の縁」を上演、盛義は森川の子を演じる。また、創作組踊部門で盛義舞踊研究所は仲井真元楷作「恩愛綾蝶感応の巻」を演じる。さらに、川平朝申作、盛義振付・演出の新作組踊「伊江島の遺念—小禄親方の最期—」を上演、盛義は小禄親方を演じる。

1964(昭39)年
• 11月16日・17日、沖縄タイムス第5回芸術祭で舞踊部門および太鼓の審査員。招待部門で盛義舞踊研究所は、盛義振付の創作組踊「王女と犬太郎」を上演。また、盛義は「前の浜」を踊り、男女打組踊「交遊(あやぐ)」にも出演する(タイムスホール)。

1965(昭40)年
• 4月10日・11日、野村流古典音楽保存会創立10周年記念芸術祭で、盛義は舞踊「老人踊り」を踊る(新報ホール)。
• 7月1日、沖縄芸能(舞踊ならびに演劇)に尽くした功績で、第9回沖縄タイムス

賞文化賞を受賞。盛義は受賞の喜びを「権威あるタイムス賞を与えられまことに光栄です。これは私自身の力ではなく、私を指導して下さった先輩たちや、協力して下さった関係者みなさまのおかげだと深く感謝しています。私に負わされた仕事はまだたくさん残っているので、現状にあまんじるこなく、今後も研究をつづけたい」と語っている（同日、「沖縄タイムス」朝刊）。

1966(昭41)年・2月9日・10日、琉球組踊保存会(会長:真境名由康)主催第1回鑑賞会で「大川敵討」を上演、盛義は村原のひやを演じる(タイムスホール)。

- 9月、琉球新報社主催第1回琉球古典芸能コンクール(新報ホール)。盛義は舞踊部門の審査員をつとめる(～1970)。
- 11月27日、第1回沖縄タイムス芸術選賞選抜芸能祭で組踊「大川敵討」を上演、盛義は村原のひやを演じる(タイムスホール)。

この年から、琉球新報社で琉球古典芸能コンクールが開催されたことを契機に、盛義と盛義の主宰する舞踊研究所(玉城流)は、琉球新報社で芸能活動を展開することになる。1954年から沖縄タイムス社の新人芸能祭や芸術祭に関わっていた盛義は、数かずの作品をそこで発表した。盛義の手記に「舞踊の指導にたずさわって居られる沖縄タイムス社の社長や、委員長に深く感謝しなければならない」というのがあり、さらに、次のように記している。

私は幼い時から踊りが好きで、若い頃から踊りを研究して居る。ところで、戦前の舞踊愛好者といえば、辻町の舞妓たちや舞台俳優だけで、当時の社会は、素人の娘さんが踊りを習うのを白眼視していた。わけても、上流家庭の娘は、琉舞は好きだけど世間から玄人女と思われるのを嫌って、習いそびれていた。当時の人たちは、あまりにも舞踊に対する理解がなかった。それに比べて戦後は、芸能が大変盛んになり、琉舞愛好者が急激にふえて、良家のお嬢さんたちがどんどん進出している。それも毎年、沖縄タイムス社主催のベストテンが行われているからで、琉舞は段々盛んになって来た。

盛義は、新人芸能祭や芸術祭が沖縄芸能の保存・継承と普及に果たした役割を評価している。また、次のようなことも書きのこしている。適切な提言をしているので、煩をいとわず引用してみたい。

戦後、沖縄タイムス社主催の芸術祭を開催して以来、沖縄の音楽・舞踊の進歩を見た事は、吾々指導者としてほんとに喜ばしい事である。沖縄が世界的に各方面から関心を持つようになったのも、この芸術に依って印象づけられた事があると思ふ。現在、沖縄の音楽や舞踊は、年長者と云わざ子供に至るまで、殆どが愛好されているので、自然に競争心が盛んになり、昔の様に生カジリの上手主義は通らない様になって居る。

これは、一般の人々の見る目聞く耳と、皆がこれに対し認識が深くなつて居るからである。それ故に、音楽・舞踊を研究する人々は、尚更に熱心に勉強しなければいけない様になって居る。それに依つて、芸術の意欲を高め、郷土芸能を正しく保存し、新しい文化の創造に尽くす事が出来ると思ふのである。これは確かに芸能祭に依つて与えられた大きな現れだと信じて居る。其の反面に於いて、吾々が多少不安に思つて居る事は、芸能祭に依つて最優秀賞を受賞した人々のなかで、上手氣取りで研究心がゆるんでしまい、知らず知らずに退歩して行く様な人々も見うけられるのは、誠に遺憾に思ふ。しかし、今回の大賞の応募種目に依つて、舞踊家が研究の機会を得た事は、ひとえに芸能祭の意義ある賜物だと思ふ。之に依つて、後世、その名を残す人々が何人か居るでせうが、吾々はその様な人々が多数出て来る事を希望して居る。今後もこの芸能祭に依つて、優秀な人材が数多く生まれて来る事を望んでやまないのである。

いっていることは、芸能コンクールで賞を受賞したからといって奢ることなく、地道に踊り込むことが優れた舞踊家になることだ、ということである。近時、芸能界は隆盛を極めて裾野が広がっている一方で、<技法>の正しい継承の仕方をはじめ、さまざまな問題を抱えていて危機が叫ばれている。その問題の解決方法として、いわゆる<量>よりも<質>の向上に重きをおく方がよいといわれるが、盛義のこの提言は今日の沖縄芸能界の状況に照らし合わせても、当を得ているといえよう。

1967（昭42）年　・1月、国立劇場琉球芸能第1回公演「冠船舞踊・組踊」で、盛義は組踊「花壳の縁」の森川の子を演じる（国立劇場小劇場）。

- ・3月18日、盛義、親泊興照、宮城能造、高嶺善繼、金武良章、阿波連本啓、宇根伸三郎、比嘉清子、幸地亀千代、宮里春行、平良雄一、知念松盛らが「琉球芸能協会」（仮称）結成準備委員会を開く。同協会の目的は、「琉球の舞踊、音楽、組踊など琉球芸能全般にわたる研究、後継者の養成と中央への進出をはかることなど。このため新しい時代にマッチした方法で、若い芸能人が勉強できる研究機関を設置し、この研究機関と芸能協会が一体となって春秋2回の研究発表会を催すほか、新しい企画として舞踊部、音楽部、組踊部を設置、古典芸能の保存と後継者の育成を具体的に進めていく方針」であった。
- ・4月4日～6日、玉扇会玉城盛義舞踊研究所主催第14回発表会「春の踊り」公演で、新作組踊「中城落城」を上演して盛義は護佐丸の役を演じる（新報ホール）。
- ・4月12日・13日、組踊記録映画作成で、盛義は「花壳の縁」の森川の子を演じる（国立劇場小劇場）。
- ・5月7日、<沖縄芸能連盟>を結成、会長に盛義が就く（～1971年）、副会長に幸地亀千代、金武良章。事務局は琉球新報社事業局内。

- 6月5日、琉球政府文化財保護委員会が組踊「五組」を重要無形文化財に指定する。盛義は<組踊演者>として保持者に認定される。組踊演者は盛義のほかに真境名由康、親泊興照、島袋光裕、宮城能造、上間朝久、金武良章。
- 7月、沖縄芸能連盟が玉城朝薰祭を催し、組踊を上演、その純益金で、那覇市首里儀保町に<玉城朝薰生誕の碑>を建立する。
- 10月、琉球芸能伝承の会結成、盛義は顧問となる。
- 11月1日～4日、第2回琉球古典芸能祭で、盛義は組踊「女物狂」の座主、「銘苅子」の上使を演じる。

1968（昭43）年 5月26日、伝統組踊保存会の総会で、盛義は会長に就く。

- 7月17日、那覇市史編集室の資料作成で、演劇懇談会が八汐荘で開かれ、盛義、真境名由康、比嘉正義、島袋光裕、宮城芸造、鉢嶺喜次が、明治・大正・昭和の演劇諸事情を語る。

1969（昭44）年 2月12日、伝統組踊保存会（会長：盛義）の総会を文化財保護委員会庁舎で開く。

- 4月29日、琉球芸能に尽くした功績を讃えられ、叙勲（勲五等瑞宝章）を受賞する。
- 11月3日、琉球古典芸能の継承と普及に尽くした功績で、琉球新報社から第5回「琉球新報賞」を受賞する。

1971（昭46）年 12月19日、県立那覇病院で83歳の生涯を閉じる。那覇市識名の玉城家の墓所に葬る。

1972（昭47）年 4月9日、<玉城盛義追悼公演>を催す。組踊「二童敵討」ほか上演（新報ホール）。

1977（昭52）年 12月20日（夜）・21日（昼・夜）、玉城流玉扇会・追善公演実行委員会主催による<玉城盛義七周忌追善公演>が、新報ホールで催された。盛義作の舞踊劇「浦島」、舞踊「護身の舞」「鶯の鳥」「木綿花」「高砂」、上間朝久作・盛義振付・演出の創作組踊「中城落城」などを上演した。

1985（昭60）年 12月8日（昼・夜）、玉城盛義13年忌追善公演実行委員会主催による<玉城盛義十三年忌追善公演>が那覇市民会館大ホールで催された。舞踊「護身の舞」「いちゅび小」「恋の花」「鶯の鳥」「獅子舞」「戻り籠」、伊良波尹吉作・盛義振付の歌劇「西の松金」などを演じた。

1990（平2）年 12月7日、玉城盛義生誕百年祭記念碑を那覇市松尾公園に建立し、除幕式を行う。

- 12月8日、玉城盛義生誕百年祭が<昼の部>午後2時、<夜の部>6時半から、沖縄コンベンション劇場棟で催された。同公演で上演された盛義の作品は、「獅子舞」

「日傘踊り」「浦島」「鶯の鳥」「打組むんじゅる」「鳩間節（ウェーク、傘）」であった。

【二】

以上、盛義の芸歴をみてきたが、ここで盛義の人となり、芸風について考えてみたい。盛義の人柄について、多くの方がたは「優しいお顔で、口数が少なく、控え目で、温厚であった」といわれるが、芸能の世界ではどうであったのだろうか。盛義の孫にあたり、玉城流玉扇会2代目家元（盛義の後を継ぐ）の玉城秀子は、次のように語っている。

盛義は三味線や琴を自ら演奏しながらうたって、踊りの稽古をしたこともあった。太鼓を演奏することもあった。小道具も自作のものを使用した。発表会の際の舞台幕の絵も盛義が描いた。創作舞踊で、とくに群舞の構成がうまかった。発表会にむけての稽古は、半年前からはじまった。それほど広くもない稽古場で、群舞の部分的な稽古しかできないので、稽古を見ただけではどのような展開になるのか想像がつかなかつた。発表会の舞台にのせてはじめて全体がわかる、ということが何度もあった。

稽古のときも口数が少なく、ポツリポツリと話されるだけであった。おだやかな顔ではあったが、稽古のときの＜目＞は実に厳しかった。弟子が下手に踊ると、盛義は踊り子から目をそらして、窓の外を見たり、天井を見たりした。そういう盛義の表情をみると弟子たちは「ああ、先生は今の踊り方がきっとお気に召さないんだな」と察し、それではというとで、何度も繰り返し踊り、盛義に再度見てもらった。ということである。

稽古場での盛義は、黙ってじーっと厳しい眼差しで弟子たちの踊りをみながら、繰り返し繰り返し踊らすようにしむけた、ということである。この指導方法はおそらく、何回となく繰り返し踊っているうちに、＜技＞が自ずと身につくものだ、踊りは体で覚えるものだ、というような考え方（＝舞踊哲学）が盛義にはあったにちがいない。舞踊は理屈で踊るものではない、ひたすら踊り込んで体得するものだ、ということである。盛義の厳しい眼差しは芸の心髄を透視する＜目＞であった。「目は口ほどに物を言う」のである。

盛義はきわめて芸域の広い演技の持ち主であった。盛義の芸を語るとき、彼の創作活動を忘れてはならない。盛義は創作活動に非凡な才能を發揮したといわれる。1954年からはじまった沖縄タイムス社主催＜新人芸能祭＞（1959年から＜芸術祭＞に改める）における盛義の活動状況を含めて、次のような評価がある。〔註5〕

（盛義は）寡黙な人柄ではあったが、端正な芸格で、芸域の広さには定評があった。若いころはとくに女形としても人気があり、「奥山の牡丹」の船頭の娘や、「伊江島

ハンドー小」のハンドー小役、組踊でも「大川敵討」の乙樽、「手水の縁」の玉津の役などには定評があった。組踊役者としては、豪快な立役という役どころからすれば、真境名由康、島袋光裕がおり、親泊興照、宮城能造は女形として華麗な芸を見せる。玉城盛義のばあいは立役、女形なんでもこなせる芸の広さがあり、特に立役としては、「森川の子」「銘苅子」の役は盛義特有の芸格があったと言われる。玉城盛義について特筆すべき事のひとつに、数多くの創作舞踊をつくり、その作品の多くが今日でも弟子たちは勿論、一般の愛好家にも広く踊られていることと、昭和30年代には、組踊の創作活動を積極的にすすめて来たことである。上間朝久、川平朝申、仲井真元楷といった方々の台本で、作詞、作曲（選曲）を安富祖流の宮里春行が担当、振付、演出玉城盛義というメンバーで次々と作品を発表している。同時代には、真境名由康の「雪払い」「義臣国吉の比屋」「金武寺の虎千代」など創作舞踊も発表され、組踊の新しい方向性を開いて行くものと注目された。盛義の作品には「夢物語（母天女）」昭和35年上間作、「王女と犬太郎」昭和35年上間作、「中城落城（護佐丸）」昭和36年上間作、「伊江島の遺念（小禄親方）」昭和38年川平作、「恩愛綾蝶感應の巻」昭和38年頃仲井真作の七組が、貴重な組踊の創作作品としてのこっている。

盛義特有の芸格があったといわれる「森川の子」「銘苅子」の役は、台詞の唱え（=吟ジケ）でいえば、「和吟」ということになる。組踊の吟ジケについて、真境名由康は図1のように述べている。〔註6〕

吟には強吟と和吟がある。強吟は声に力を込めて唱えるもので、その中にも底吟と地吟がある。「二童敵討」の阿麻和利や「大川敵討」の谷茶接司ら主に仇役は底吟、老人は地吟だった。底吟は名のとおり、腹の底からしぶり出すように唱えた。和吟は声を柔らかく唱えるもので役も多い。「銘苅子」の銘苅子や「執心鐘入」の座主など、声に力を入れず唱えた。

盛義は、盛重に指導を受けていたところを振り返って、次のようなことを述べている。再度「わが踊り初めの記」（1968年）を引用してみる。

ともかく修業時代、古典舞踊の魅力にとりつかれていた私は、まず古典のもつ深さというものを知ろうと努力し、それをこなすためには、その古典の世界を自分の中にしっかり身につけることだと懸命だった。しかし、やればやるほど古典のむずかしさを強く味わうばかりだった。幼少時代から養父（盛重）のけいこのきびしさがなければ、今日の私はもちろんなかっただし、修業がきついからと途中で投げ出さなかったことだけは、つくづく

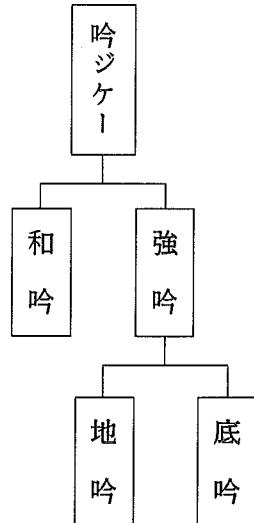


図1. 真境名由康による体系

よかったですと考へてゐる。……今日の琉球芸能は戦前の私が夢想だにしなかったほどの興隆ぶりを見せ、まことに頗もしいし、隔世の感ひとしおである。すばらしいことだと思う。琉球古典芸能コンクールのような有意義な文化事業などで、次々に後継者となり得る新人が発見されている。しかし、賞をもらったからとか落ちたからといって気を抜いていてはいけないと思う。踊りの深さは決して簡単に知ることはできない。いつまでも血のにじむような修練が必要であり、それを実際にやりぬく考えだけが、眞の伝統の後継者となってゆくだろう。……修練というものはきびしいけれども、それを乗り越えて行こうとする気持ち、そして実際に一つ一つ芸をこなし、目標へ向かって進んで行くときの充実感は、何ものにもかえがたい喜びである。私は若いころ、このきびしさを自分自身の力で克服して行こうと努力し続けたものである。

芸能実演家としての心得を述べたものであるが、盛義自らの体験に基づいていることだけに、説得力のある貴重な指摘である。

玉城盛義の芸歴と芸風をみてきたが、生誕100年という節目で、我われは盛義の業績を整理して評価し、沖縄芸能史にきちんと位置付けることをしなければならない。特に盛義の薰陶を受けた門弟は、流祖の芸風を今後どのように保存・継承していくかねばならないのか、心ひとつにして研鑽することを確認する好機ではあるまい。盛義が沖縄芸能界にのこした足跡が大きいだけである。

[註1] 真境名由康の場合は、1989年に「真境名由康誕生100年記念事業会」を結成し、同記念事業会が主催して①芸能資料展、②記念講演会、③記念芸能講演会、④『真境名由康一人と作品一』下巻(資料編)刊行、⑤胸像製作・設置等の事業を行った。

玉城盛義の場合は、1990年に「玉城盛義生誕百年祭実行委員会」を結成し、同実行委員会が主催して①記念碑建立、②生誕百年祭(記念芸能祭)等の事業を行った。

[註2] 玉城盛義誕生百年祭パンフレット所収、1990年、実行委員会刊。

[註3] 『沖縄大百科事典』中巻の「玉城盛義」の項、宜保栄治郎執筆、1983年、沖縄タイムス社刊。

[註4] 『沖縄県史』第6巻・各論編5、文化2、第3章演劇の項、池宮正治・宜保栄治郎執筆、1975年、沖縄県教育委員会刊。

[註5] 『平成元年度 沖縄の伝統芸能に関する調査報告書』二、沖縄の伝統芸能の現状調査、1. 舞踊伝承者についての事例報告「玉城流玉扇会家元 玉城秀子」の項、1990年、文化庁文化財保護部伝統文化課刊。

[註6] 抽論「真境名由康論序説」「紀要」第3号、1986年、沖縄県教育庁文化課刊。

なお、本稿をまとめにあたり、玉城秀子師の御協力を得た。掲載の写真も秀子師から拝借した。衷心より御礼と感謝を申しあげる次第である。



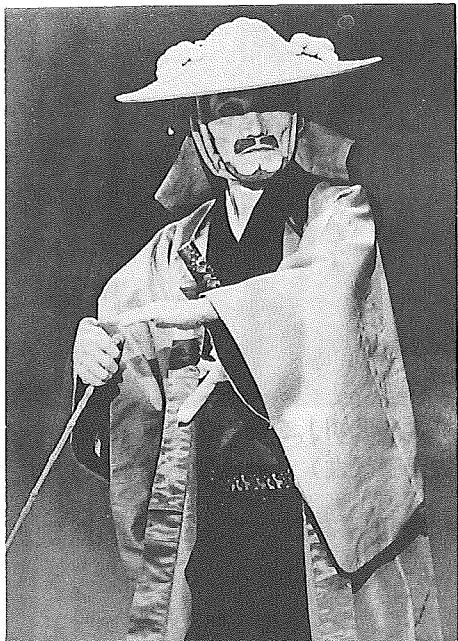
創作組踊「中城落城」の護佐丸
を演じる盛義（1961年頃か）



「加那よ一天川」を踊る盛義（右）と
我如古安子（左）（戦後間もない頃）



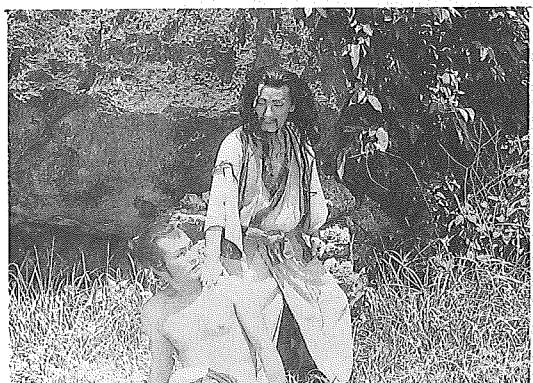
国立劇場琉球芸能第1回公演の際、国立劇場小劇場の楽屋で撮る。
前列左から親泊興照、宮城能造、盛義、真境名由康、島袋光裕、川
田松夫。いずれも故人となられた。（1967年1月）



「八重瀬万歳」を踊る盛義。



宮城能造の三線でカチャーシーを踊る盛義。
能造の右隣は島袋光裕。



「武士松茂良」のロケ。右が盛義、
左は松村興栄。



戦後初めての沖縄芸能の東京公演、日比谷公会堂にて。前列左から志田房子、若柳美之介、玉城秀子、宮平敏子。後列左から南風原朝光、島袋光裕、盛義、比嘉澄子。

(1953年11月)